

佐久市埋蔵文化財調査報告書 第28集

そねしんじょう

曾根新城遺跡 V

長野県佐久市長土呂曾根新城遺跡 V 地区発掘調査報告書

1 9 9 4 . 3 .

中 沢 健

佐久市教育委員会

佐久市埋蔵文化財調査報告書 第28集

そねしんじょう

曾根新城遺跡 V

長野県佐久市長土呂曾根新城遺跡V地区発掘調査報告書

1 9 9 4 . 3 .

中 沢 健

佐久市教育委員会

例言

- 1 本書は、1993年11月1日～1994年3月31日にわたって発掘調査、整理された長野県佐久市大字長土呂字曾根新城に所在する曾根新城遺跡Ⅴ地区の埋蔵文化財調査報告書である。
- 2 本調査は中沢健氏が株式会社住建に造成工事を委託し、貸店舗及び駐車場（株式会社アルペン）建設工事が行われることとなり、埋蔵文化財の破壊が余儀なくされたためのものである。
- 3 発掘調査は佐久市教育委員会埋蔵文化財課が担当した。
- 4 本書は森泉かよ子が編集・執筆した。
- 5 本遺跡の出土遺物は佐久市教育委員会の責任下に保管されている。

凡例

- 1 遺構の略称は次のとおりである。
H-住居址 F-掘立柱建物址 D-土坑 M-溝址 P-ピット
- 2 挿図の縮尺は次のとおりである。
遺構-1/80 カマド-1/40 遺物-1/4 一部異なる縮尺もあり。
- 3 挿図中におけるスクリーントーンは以下のことを現す。
遺構 地山断面-斜線 焼土-砂目 柱痕-砂目極細 粘土-点
遺物 土器器面黒色処理-点 灰釉陶器-砂目極細
- 4 遺構の海拔標高は各遺構ごとに統一し、水系標高を「標高」として示した。
- 5 土層・遺物胎土の色調は、1988年版『新版 標準土色帖』に基づいて示した。
- 6 住居址の調査上の区画は北・カマドを基準としてある。反時計回りにⅠ～Ⅳ区に分けた。

N



目 次

例言

凡例

第Ⅰ章 発掘調査の経緯	1
第1節 発掘調査に至る動機	1
第2節 調査の概要	2
第3節 調査日誌	3
第Ⅱ章 遺跡の立地と環境	4
第1節 自然環境	4
第2節 歴史環境	4
第Ⅲ章 基本層序	5
第Ⅳ章 遺構と遺物	8
第1節 竪穴住居址	8
第2節 土 坑	20
第3節 溝状遺構	29
第Ⅴ章 調査のまとめ	30

引用参考文献

曾根新城遺跡Ⅴ地区竪穴住居址・土坑一覧表

曾根新城遺跡Ⅴ地区土器一覧表

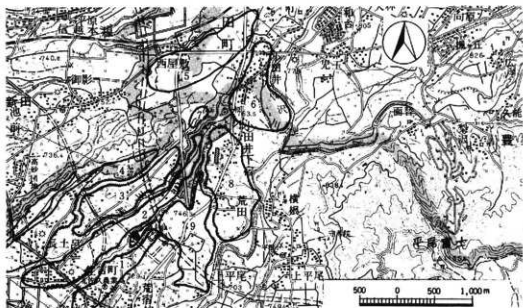
第Ⅰ章 発掘調査の経緯

第1節 発掘調査に至る動機

曾根新城遺跡は佐久市の北部、浅間山南麓の末端部にあたり、南西方向にのびる田切り地形の台地上にある。標高734～736mを測る。

本遺跡は、平成2年度の岩村田北部土地区画事業に伴う仙稜湖線工事に先だって発掘調査が実施され、「曾根新城遺跡1」として竪穴住居址等が検出されている。

今回、平成5年になって中沢健氏により貸店舗及び駐車場建設（株式会社アルペン）が計画されたため、試掘調査したところ遺構が検出され集落址であることがわかった。発掘調査が必要となったため、中沢健氏の委託を受けた佐久市教育委員会が調査を実施することとなった。



- 曾根新城遺跡V地区 1.枇杷坂遺跡群 2.長土呂遺跡群（聖原遺跡） 3.芝宮遺跡群
4.周防畑遺跡群 5.鉤師屋遺跡群 6.中金井遺跡群 7.曾根城遺跡
8.跡坂遺跡群 9.栗毛坂遺跡群 10.曾根新城遺跡

第1図 曾根新城遺跡V地区の位置図・周辺遺跡分布図（1：50,000 国土地理院地形図より）

第2節 調査の概要

遺跡名 曾根新城遺跡V (NSV)

所在地 佐久市大字長土呂曾根新城112-1, 113-5

調査期間 1993年11月1日～1994年3月31日

調査面積 約3300㎡

調査委託者 佐久市大字岩村田356

中沢 健

調査組織 佐久市教育委員会埋蔵文化財課

教 育 長 大井 季夫

教 育 次 長 奥原 秀雄

埋蔵文化財課長 上原 正秀

管 理 係 長 小林 泰子 (平成4年4月着任)

埋蔵文化財係長 草間 芳行

埋蔵文化財係 林 幸彦 高村 博文 三石 宗一 須藤 隆司

小林 眞寿 羽毛田卓也 富沢 一明 上原 学

調 査 担 当 者 高村 博文

調 査 主 任 森泉かよ子

調 査 員 井出 愛子 井出つねじ 大井 キセ 小田川 栄 村松とみ子

木内 明美 茂木とよ子 柳沢千賀子

報告書作成分担

土 器 実 測 森泉かよ子

土 器 復 元 井出 愛子 小田川 栄 茂木とよ子

図 面 修 正 木内 明美

ト レ ー ス 木内 明美 柳沢千賀子 上原 学

第3節 調査日誌

- 1993.7 試掘調査
- 1993.11.1～5 重機による表土剥ぎ
- 1993.11.4～ 遺構プラン確認を始める。機材の搬入。
遺構の検出、掘り下げ、実測作業開始。
- 1993.12.1 現地における作業を終了。機材撤収。
- 1993.1～1994.3 遺物の洗浄、注記、図面修正等に着手。
土器の復元、土器の実測、トレース、遺物の写真撮影等を行い、報告書の編集、
原稿の執筆をして刊行する。



写真1 航空写真。トレンチが横に入っている所が曾根新城遺跡Ⅴ地区である。手前の調査区は
区画整理の道路で、曾根新城遺跡Ⅲ地区である。(撮影協同測量社)

第Ⅱ章 遺跡の立地と環境

第1節 自然環境（第1図）

浅間山の噴出物である降下火山灰砂が堆積し、生活地表面をなしている地質範囲のため、水の侵食を受け流出し易く、田切り地形が発達している。台地上には集落を中心とした遺跡が分布し、田切りは浅間山山麓の湧水の流下流路となっており、濁川をはじめとして標高750m以下の稲田耕作を支えてきたと考えられる。（1990・白倉盛男）

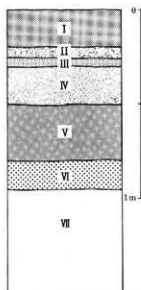
第2節 歴史環境（第1図）

本遺跡の周囲は上信越自動車道が開通し、佐久インターが当地に設けられたことにより開発が盛んな地域である。また遺跡の分布は第1図に記載してあるように、台地の全面に分布している所である。すぐ北の台地には聖原遺跡があり、佐久流通業務団地造成事業に先だって発掘調査されることになり、平成4年現在までの4年間にわたり7万㎡以上の調査が進み、竪穴住居址799棟、掘立柱建物址663棟等を検出している。古墳から平安時代にかけての大集落であり、細長い台地上全面に広がっている。さらに北の台地に芝宮遺跡があるが、やはり同様の集落が広がっている。さらに北の小田井地区にある鉦師屋遺跡群は、古墳時代中期から奈良・平安時代の集落であるが、多数の馬骨の出土から、『延喜式』にある御牧・塩野牧、東山道長倉駅に関わった人々の集落ではないかという遺跡である（1985・堤 隆）。

当遺跡の南には枇杷坂遺跡群上久保田向遺跡があり、ほぼ平行して調査が進み平安時代の集落が確認されている。殊に上久保田向N地区の現在ガソリンスタンド地点で検出された住居址は平安時代末のもので本遺跡と同時期である。上久保田向遺跡のさらに南には弥生時代後期の集落の清水田遺跡、上直路遺跡がある。東隣には周防畑遺跡があり、弥生時代後期・奈良・平安時代の集落が分布している。

本遺跡の北側には古墳中期の以降の集落が展開し、南側には弥生時代後期の集落が見られる。しかし、上久保田向遺跡と曾根新城遺跡では今のところ弥生・古墳時代の遺構は検出されず、縄文時代の狩猟用の落し穴があるのみである。平安時代まで開発されなかった地域である事が解ってきた。

第三章 基本層序



第2図 基本層序模式図

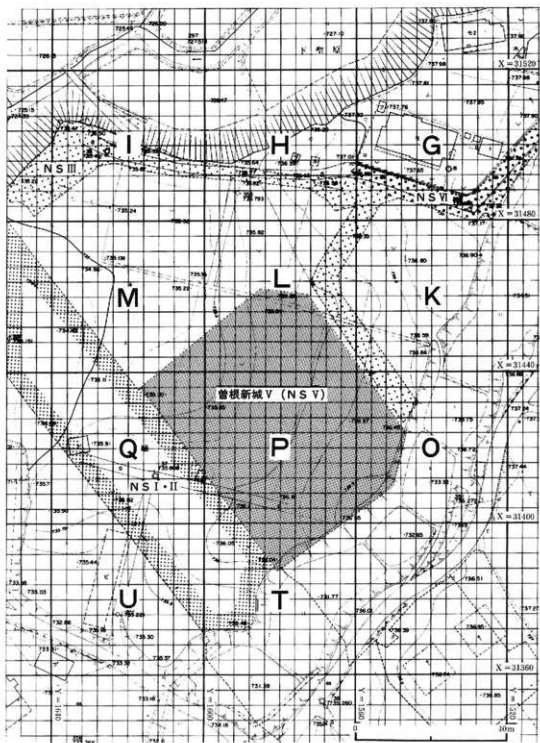
- 第I層 黒褐色土 (10YR 3/2)
耕作土
- 第II層 黒色土 (10YR 1.7/1)
砂質層。低所に堆積。
- 第III層 灰黄褐色土 (10YR 5/2)
シルト質の緻密土。低所に堆積。
- 第IV層 暗褐色土 (10YR 3/4)
細かいもの～5mm大の砂粒を含む砂層。
- 第V層 黒色土 (7.5YR 1.7/1)
2～3mm大のパミス含む。粘性あり。
- 第VI層 にぶい黄褐色土 (10YR 4/3)
ローム層
- 第VII層 明黄褐色土 (10YR 6/6)
やや砂質のローム。



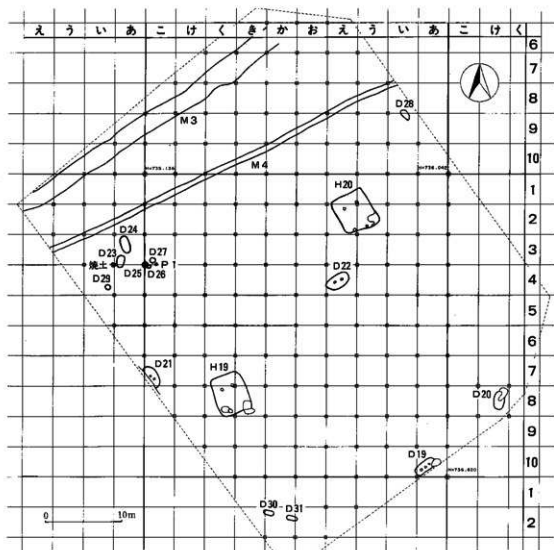
写真2 基本層序

M3号付近。右の下に下がる線がM3の覆土。

曾根新城遺跡V地区はゆるやかな北斜面にあたり、南と北の60mの間に標高736.5m～735.3mと1.2mもの標高差がある。土層の堆積も傾斜に従って異なった状態になっている。図示した基本層序模式図は最も低い地点の堆積である。高くなるにつれて上から一層ずつ堆積せず、南側は耕土の下は、ローム層である。遺構は耕土を除去した段階で確認でき、遺構確認面も地点により異なる。



第3图 曾根新城遺跡V地区発掘区設定図(1:1000)



縄文時代	土坑	D19・D20・D21・D22	4基
平安時代	竪穴住居址	H19・H20	2棟
	土坑	D23・D24・D25・D26・D29	5基
	溝状遺構	M3・M4	2本
時期不明	土坑	D28・D30・D31	3基

第4図 曾根新城遺跡V地区全体図(1:500)

第IV章 遺構と遺物

第1節 竪穴住居址

1) H19号住居址

遺構 (第5・6図、写真3～9)

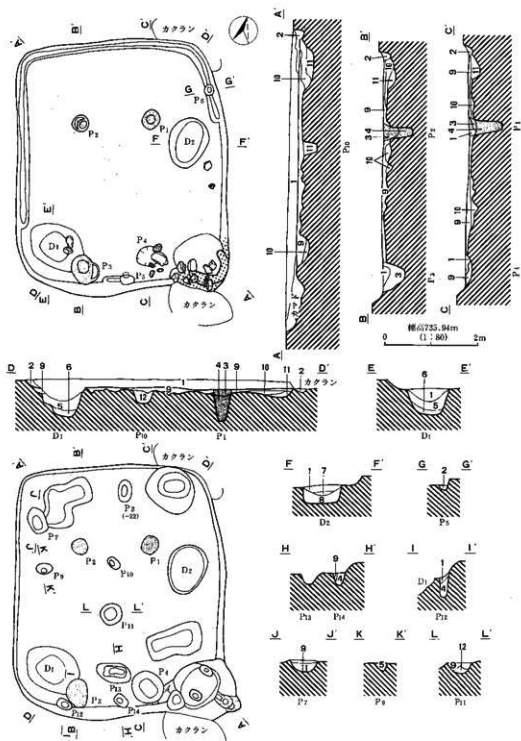
調査区南西中央のPき-7グリットにある。全体層序第Ⅵ層にぶい黄褐色土で検出された。カマド南と北東の一部に攪乱が入っていたが、全体の残りは良好である。南北5.1m東西4.2mの隅丸長方形を呈し、壁残高は20cmを測る。カマドは南東隅にあり、主軸方位N-18°-Wをさす。覆土は黒色土で小円礫を含む。壁際には黒褐色土がある。床面は黄褐色ロームと黒色土の混入した土を貼り床し、堅く締まっていた。床下は生活面より、4～10cm程掘り込まれて下がり、隅は土坑状に低くなる。

柱穴は主柱穴4本であるが、P1～P3は柱痕の残る深いビットが検出されたが、P4はわずかに窪みだけのビットであった。円形で径30～62cm深さ55～67cmを測る。土坑は南西隅と北東にあり、D1は長径120cm短径90cmの楕円形で深さ55cm。D2は長径110cm短径80cmの楕円形で、深さ19cmの浅いところで貼り床の土層が薄く弧状にあるのが観察された。最初の掘り込みは床より56cmまで下がり、貼り床層は土坑の陥没によるものと思われる。また床下よりP7からP14のビットが検出された。P9・10・12・14はH19の主柱穴より南西にややずれた位置にあり、旧住居址が下に存在し、本住居址は拡張したようである。

カマドは南東にあり、南の攪乱によりカマドの右袖の一部が破されている。カマドは20cm大の石を組んで、にぶい黄褐色粘土を充填したものであるが天井部は削平され両袖を残していた。カマドの規模は火床部幅100cm奥行き110cmを測る。焼土は良く残り、火床部も良く焼け込んでいた。

H19土層説明

1. 黒色土 (10YR1.7/1) 5cm大の小円礫を含む。まれに1cm大のバミス含む。	7. 黒褐色土 (10YR2/3) 1cm大のロームブロックを含む。上面が叩かれてしまりのある貼り床層。
2. 黒褐色土 (10YR2/2) 壁跡でローム含む。	8. 黒色土 (10YR1.7/1) 細かい礫含む。しりなし。
3. 黒褐色土 (10YR2/3) 黒色土にローム含む。	9. 黒色土 (10YR1.7/1) ローム・バミス混入する貼り床。壁跡。
4. 暗褐色土 (10YR3/3) 柱痕。砂質。ローム粒子多く、まるでしりなし。	10. 暗褐色土 (10YR3/4) 砂質。ロームに黒色土含む。
5. 黒褐色土 (10YR2/2) 黒色土と黒褐色土でブロックを含む。	11. 暗褐色土 (10YR3/3) 砂質。
6. 暗褐色土 (10YR3/3) ローム (砂質) 多い。	12. 明黄褐色土 (10YR6/6) 砂質。



第5図 H19号住居址実測図

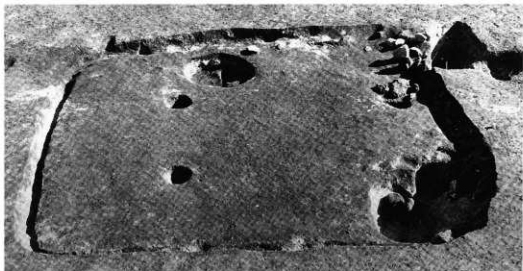


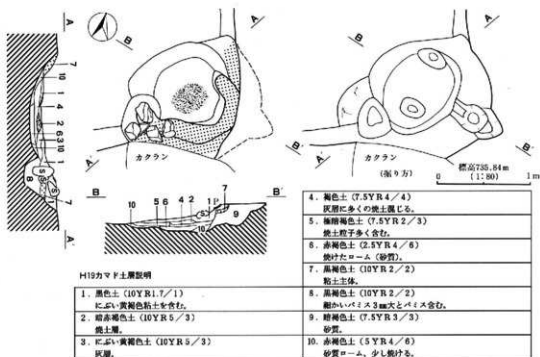
写真3 H19号住居址。使用面。(西より)床面は堅く締まっていた。右上(南東)にカマド。



写真4 H19号住居址。掘り方。(東より)左下がカマドの跡。新たな柱穴も出てきて、下に旧住居址の存在が確認された。



写真5 H19号住居址カマド残存状態。(北より)



第6図 H19号住居址カマド実測図



写真6 H19号住居址カマド。芯材を出した状態。(北西より)



写真7 (東より)



写真8 カマド火床部を出した状態。(北西より)



写真9 H19号住居址カマド掘り方。

遺物（第7図・写真10）

全体でテンバコ半分程の土器が出土し、図示した点数は少ないが破片は多い。土師器・須恵器・灰釉陶器がある。

須恵器は図示できるものがなく、破片である。大甕の胴部片で外面は浅い平行タタキ目を雜にし、内面は円弧文のタタキである。

灰釉陶器は小破片が2個あり、小瓶と壺の胴部片である。

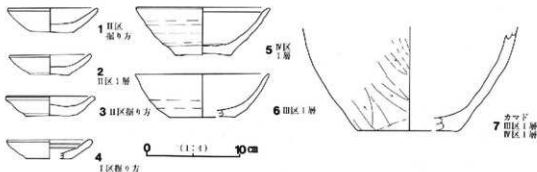
土師器は甕・羽釜・杯・小皿形土器がある。

甕は図示した7が胴下半分はあり、口縁部形はわからないが、器肉が1cmと厚く、外面ヘラケズリ調整である。

同じタイプでもう少し厚手で、堅く挽成の良い、大きいタッチのケズリを施すものもある。

他に甕で口縁部横ナデ、胴部縦のヘラナデの口縁部形「く」の字に外傾するものは、器肉8mmである。内外黒色である。

甕あるいは銅になるのであろうか、口縁部が内稜を持って凹んで外傾するものは、内面横ナデ、外面口縁部は横ナデ、胴部は縦方向のヘラケズリの後、横方向に雜なミガキを施している。



第7図 H19号住居址出土遺物実測図



写真10 H19号住居址の土器。土師製の杯・小皿類が主体となる。甕類は厚手、羽釜は鈎が全周しないものになる。

羽釜は鈎が切れて一周しないものだけで2種あり、両方鈎を欠いている。一つは口縁部から鈎まで3cm、口縁端部は丸みを持ち、推定口径33cm、羽釜としては薄手で器肉8mmを測る。調整は外面口縁部は横ナデ、胴部縦ナデされる。他は口縁部端部を面取りし角張り、口縁から鈎まで1.2cm、器肉1cmを測る。調整は同様である。

土師器甕類の胎土は1から2mm大の粗い粒子をまれに含むが全体的には細かいものである。焼き締まりはものにより、全般には締まっているが、胴部ナデ調整の要ないし鍋は軟質である。

土師器杯類は小皿と杯がある。碗は破片のみである。小皿は図示した1・2が焼成も良く、端部・身部細身である。胎土は粉末質の細かいものである。それとは対称的に3・4は分厚く端部も丸く肥厚し、焼成もあまく、調整も雑である。3は粗い砂粒を多く含んでいる。

土師器杯は2つ示したが器形が異なるものである。5が底部径が小さく、口縁上部で内壁を持って外板する。内外面ロクロ横ナデであるが、内面の底は押さえて渦を残している。黒色であり、黒色処理したか。胎土は緻密である。6は1・2と胎土・色調・調整の似た杯で5より底部径が大きく内湾気味に立ち上がり、端部が外反気味になる前代より続く器形である。

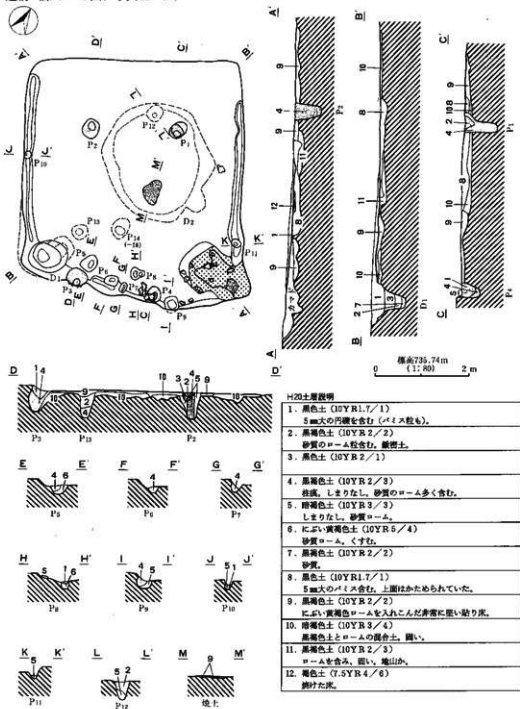
甕類は口縁部が「く」の字形に外傾、羽釜は鈎が全周せず、土師器小皿があり、肥厚したものがある。土師器杯は内外面ロクロ調整のものであることなどから、11世紀末から12世紀にかかる住居址であろう。



写真11 左側の白い部分がH20号住居址。中央にあるのがH19号住居址。3300㎡の中に堅穴住居址は2棟のみ検出された。(北東より)

2) H20号住居址

遺構 (第8・9図、写真12~16)

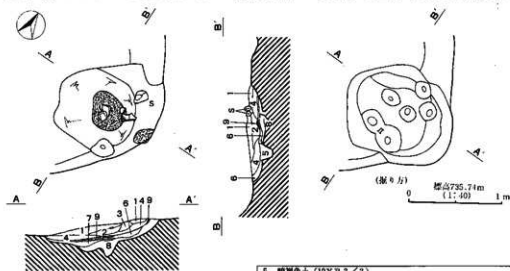


第8図 H20号住居址実測図

調査区東寄り中央のPウー1グリットにある。検出面は全体層序第V・VI層の黒色土とにぶい黄褐色土である。北側はその黒色土のため遺構検出時に下げすぎて北壁を消失している。かろうじて規模はつかむことができ、長軸5.0m短軸4.5mのやや南北に長い隅丸長方形を呈す。主軸方位はN-30°-Wを指す。カマドは南東隅にある。覆土は黒色土で、5mm大の小石を含む。

床面はにぶい黄褐色ロームを入れ込んで叩いており、非常に締まった床であった。ただし、D2の上面は黒色土がそのまま固められ、他ほど締まっていなかった。床面から床下の掘り込み面までは3cm程下がるのみである。なお、10層は掘り込んであるか地山かは、ちょうど地山も漸移層であるため確実ではない。床面からは片側が南壁中にある4本の支柱穴(P1~P4)、それに沿うような南壁のP6・P9。出入口施設のピットP5・P8と壁下に小ピットP10・11がある。支柱穴は、円形で径34cm~44cm、深さ37cm~53cmを測る。土坑が南西隅にあり、楕円形で長径80cm短径64cm深さ58cmを測る。床下からは土坑と新たなピットが出てきた。床下土坑というほど深いものではないが、中央に長径2.5m深さ9cmの円形の落ち込みがある。柱穴のP12・13が深くて良好である。この住居址が拡張ないし建て直しされたことが確認された。周溝が全周している。

カマドは南東隅にあり、天井部大半は除去され、押しつぶされた状態でわずかに残っていた。奥行き110cm、火床部幅80cmを測る。にぶい黄褐色粘土を含む黒褐色土で構築され、数個の石が混在し、肩にはポイントとなる石とピットがあく。火床には炭化物・焼土層が残り、良く焼け込む。



H20カマド土層説明

1. 黒褐色土(7.5YR2/2) 5mm~1cm大の焼土ブロックを含む、粘性あり。	5. 暗褐色土(10YR3/3) ローム粒子含む。
2. 褐色土(10YR4/4) 灰主体層、焼土、炭化物粒子含む。	6. 黒褐色土(7.5YR2/2) 粘土を含む土が焼けている。サラサラ。
3. 明赤褐色土(5YR5/6) よく焼けている。	7. 明赤褐色土(5YR5/6) 黄褐色ロームが焼けている。
4. 黒褐色土(5YR3/1) 薄い炭化物層、上面にあり。焼土粒子少ない、粘性なし。	8. 暗褐色土(7.5YR3/4) 焼土含む。
	9. 赤褐色土(5YR4/8) 焼土層。

第9図 H20号住居址カマド実測図

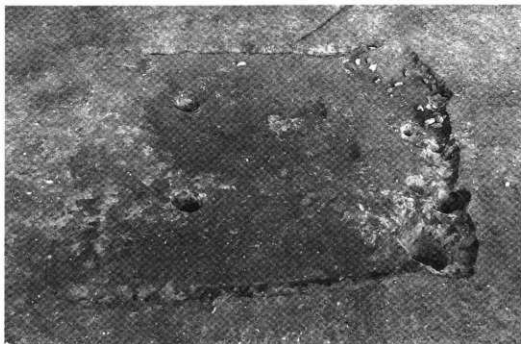


写真12 H20号住居址。(西より) 写真では隅丸方形の整った形に見えるが、図では南壁は斜めに行き、西壁の方が短い。南壁の東側が張り出しているためである。

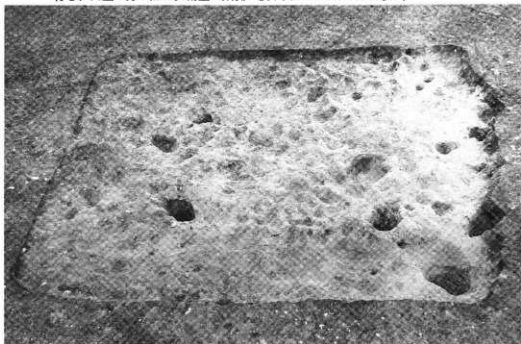


写真13 H20号住居址の掘り方。(西より) 新たな柱穴があり、拡張ないし建て直された住居址であることがわかった。



写真14
H20号住居址。
カマド残存状態。
(東より)



写真15
H20号住居址。
カマド火床部を出
した状態。
(東より)

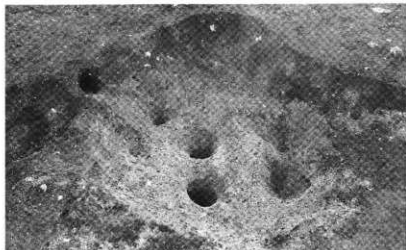
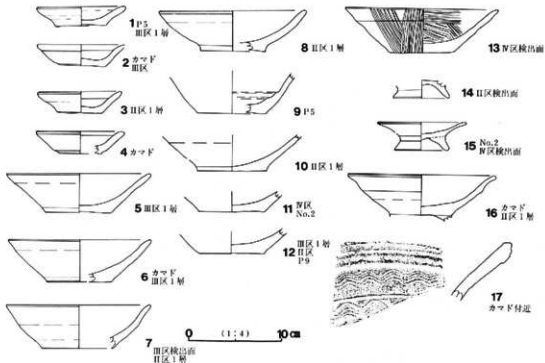


写真16
H20号住居址
カマドの掘り方。
(北西より)

遺物 (第10図・写真17)

遺物は土器のみで、実測個体の他はそれほどない(大ビニール袋1)。須恵器・土器がある。須恵器は実測個体はなく、甕形土器の胴部片が3あり、平行タタキ目を施している。内面はナデ調整されている。拓本に示した17は須恵器大甕の口縁で、櫛状具により施文されている。

土器器は羽釜・小皿・杯・碗・高台付きの皿形土器がある。羽釜は断面形三角形の鋸が全周する。丸みのある口縁で、口縁から鋸まで4cmあり、器肉8mmと比較的薄手のものである。丸底気



第10図 H20号住居址出土遺物実測図



写真17 H20号住居址出土土器

味の底部がある。

土師器小皿は、丁寧な作りで、1はそれほど明確でないが、内面に緩やかな稜を持って外反するものである。

土師器杯は口縁部が直線的に外傾する5・13と、内湾気味に開き端部で外反気味となる6・7・8とがある。口径は15cm台で大きい、器高は4cm台で低い。調整は内外面ロクロ横ナデであるが13は全面にミガキ調整が施された美しいものである。

高台の付く皿形土器は小型品で高台が割合的に高い。長脚で厚く、高台というより逆にしても器になりそうな器形である。

柄は高台部を欠損してわからない。口縁部は内湾して外傾し、外稜を持って端部外反するものである。

小皿・杯等の胎土は粉末質の細かいものである。焼き締めはあまく軟質である。15の皿は細かい石英粒の粒子が分かり他と異なる。この住居址からは煮沸具が少なく、供膳具の杯類の多いことが目立つ。

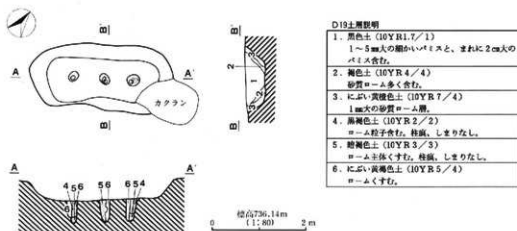
羽釜の存在、器高が低く内稜もって開く小皿の存在、器高の低い杯形土器などより、12世紀代に位置づけられる住居址であろう。

第2節 土坑

1) 縄文時代の土坑

D19号土坑 (第11図、写真18～21)

調査区南端中央のPあ-10グリットにある。東側の深い攪乱により一部壊される。楕円形を呈し、長径3.0m短径1.4m深さ46cmを測る。覆土は黒褐色土・褐色土で、にぶい黄褐色土が壁際にある。土坑底面は長径2.3m短径0.9mの中くびれとなる楕円形で、3個の円形のビット範囲があった。ビットは径15～22cm深さ48cmを測り、杭痕は径8cmで、黒褐色土が入り、その埋め土はにぶい黄褐色ロームである。遺物は出土していない。



第11図 D19号土坑実測図

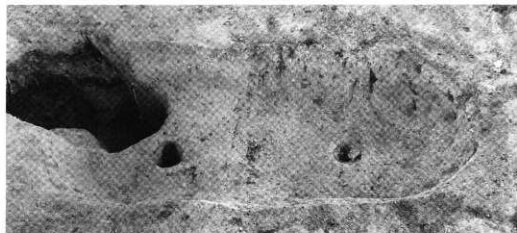


写真18 D19号土坑。底面を出した状態。底面の黒いところがビット痕である。(北より)



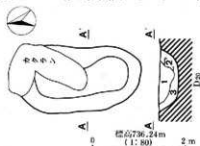
写真19 D19号土坑。(西より)土層堆積状態。



写真20・21 D19号土坑のビット半截状態。杭の入り込んでいた様子がよく分かる。下はビットを掘り上げた状態。(南より)

D20号土坑（第12図、写真22・23）

調査区南端東のOけー8グリットにある。北側に攪乱があり、北側が壊されている。長軸残長2.5m短径1.4m深さ40cmを測り、楕円形を呈する。覆土は黒色土・褐色土が入り、壁際にはぶい黄褐色ロームである。底面からピットは検出されなかった。底面は2.0m×0.7mである。



D20土層説明

1. 黒色土 (10YR1.7/1)

1～5mm大の細かいパキスとまれに2cm大のパキス含む。

2. 褐色土 (10YR4/4)

砂質ローム多く含む。

3. ぶい黄褐色土 (10YR7/4)

1mm大の砂質ローム層。

第12図 D20号土坑実測図

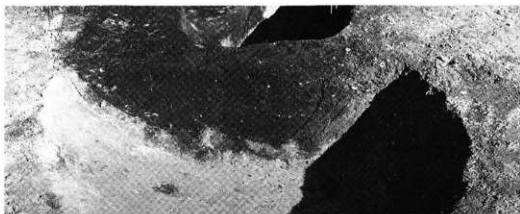


写真22 D20号土坑。土層堆積状態。(南より)



写真23 D20号土坑完掘。底面からピットのプランは検出されなかった。(西より)

D21号土坑（第13図、写真24・25）

調査区西端中央のPコー7グリットにある。西側は調査区外ですでに工事により壊されていた。長径3.0m短軸残長1.3m深さ56cmを測る。底面からは3個のビットが検出されたが、円形で径14・16・22cm深さ14～22cmと浅いものであった。遺物は出土していない。

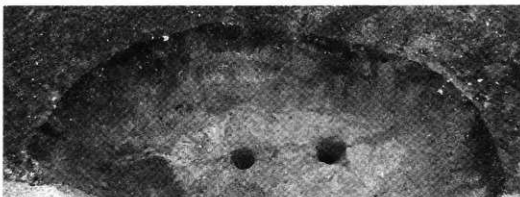
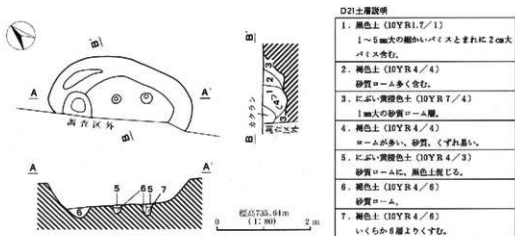


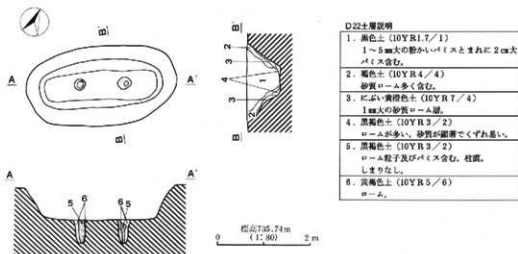
写真24 D21号土坑。完掘。(西より)



写真25 D21号土坑。土層堆積状態。(北より)

D22号土坑（第14図、写真26～30）

調査区中央、Pネー4グリットにある。長径3.1m短径1.7m深さ70cmの楕円形の土坑である。断面形は二段階の逆台形を呈し、底面は長方形に近く、2.4m×60cmを測る。覆土は黒色土、褐色土・にぶい黄褐色土である。底面からビットが2個検出された。ビット径16・20cm深さ50cmを測り、杭痕には黒褐色土、埋め土は明褐色ロームである。遺物は黒曜石製の石鏃が黒色土より出土している。長さ2cm幅1.5cm厚さ1.5mmである。



第14図 D22号土坑実測図

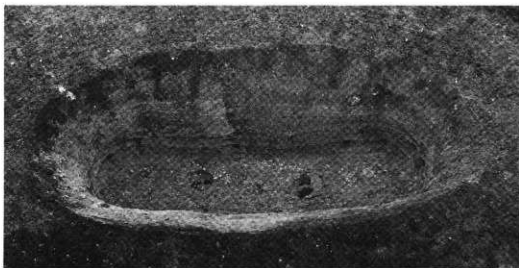


写真26 D22号土坑。土坑底面から2個のビットプランが出てきた。(南より)



写真27 D22号土坑。土層堆積状態。(西より)



写真28 D22号土坑ピット半裁状態。(南より)

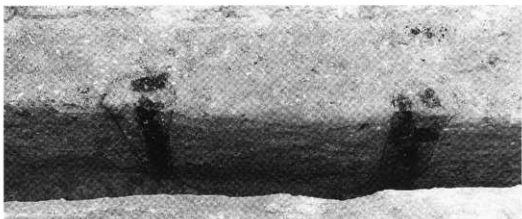


写真29 D22号土坑。掘り込んだ穴に杭が埋められているのがよく分かる。

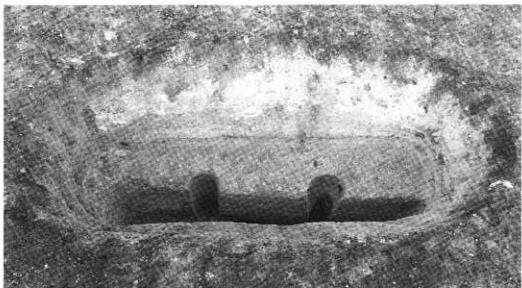


写真30 D22号土坑。ピットを掘り上げた状態。(南より)

2) 平安時代の土坑 (第15・16図、写真31~36)

遺物の伴わない土坑もあるが、検出面が同じであることや、覆土などからの推定も含めている。

D23号土坑

調査区北西、Qあー3グリットにある。長径1.5m短径1.0m深さ30cmを測り楕円形を呈す。覆土は黒褐色土で下層には1cm大の炭化物を多く含み、焼土・灰も含んでいる。遺物はない。

D24号土坑

調査区北西Qあー3グリットにある。東西に水道管の攪乱溝が走っている。長径2.1m短径1.2m深さ30cmを測り、楕円形を呈す。黒褐色土が覆土である。遺物は出土していない。

D25号土坑・D26号土坑

調査区北西、Pこー4グリットにある。D25号土坑は径70cm深さ16cmの不整な円形を呈す。覆土は黒褐色土で焼土粒子を多く含んでいる。D26号土坑はD25号土坑に切られているが同色であるためはっきりしない。径50cm深さ19cmの円形を呈する。遺物は出土していないが、検出時に上面より土器が出土している。図示した内面ミガキ黒色処理した碗と、図示できなかったが、内面ミガキのみで胎土の粗雑な碗、H19号住と同じ様な弱いタタキ目を施した須恵器大甕胴部片がある。

D27号土坑

調査区北西、Pこー3グリットにある。径70cm深さ16cmの円形のもので、黒褐色土が入る土坑である。上面より内外面ロクロ横ナデ調整の杯の破片が4片出土している。一つは外面にわずかながら墨書の痕がある。

D29号土坑

調査区北西、Qいー4グリットにある。径70cm、深さ25cmの円形を呈す。覆土は黒褐色土で下面に厚く灰層の堆積がみられた。D29号土坑からは図示した、内外面ロクロ調整、底部回転糸切りの杯形土器が出土している。胎土は粗雑で焼きはあまい。

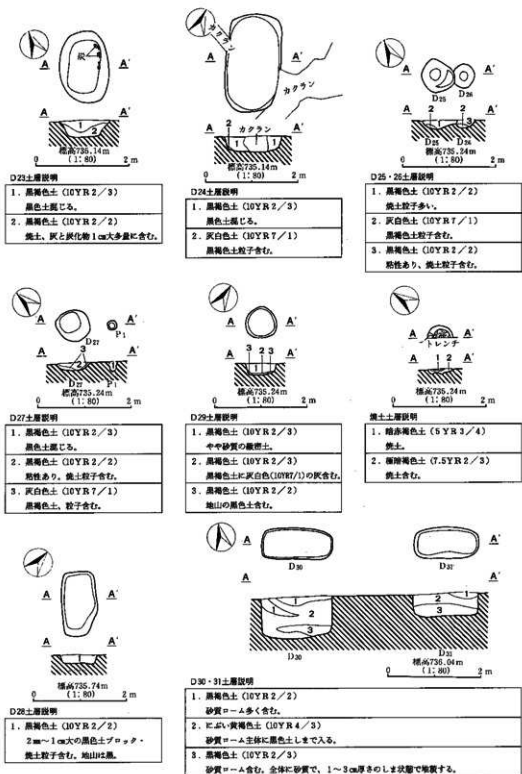
3) 時期不明の土坑

D28号土坑

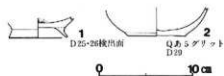
調査区東端の北寄り、Lいー8グリットにある。1.4×0.8mの不整形を呈し、深さ16cmを測る。黒褐色土に焼土粒子を含む。遺物は出土しない。

D30・31号土坑

調査区南西にあり、Tかー2グリットにある。D30・31号土坑は長軸1.4m幅60cmの隅丸長方形と同じもので、深さが異なる。深さ84・40cmである。覆土の堆積も同じである。縞状にロームを含む土がみられる。



第15図 D23~D31号土坑・焼土実測図



第16図 土坑出土土器実測図

焼土

調査区北西の土坑群の間に焼土範囲がある。Qい
-4グリット。半分はトレンチで削ってないが、径
54cmの円形範囲で焼土がみられた。遺物はない。



写真31 D23号土坑（東より）



写真32 D24号土坑（東より）



写真33 手前25・26号土坑。右上D27号
土坑。P1。（南より）



写真34 D23～D27号土坑全景
（北西より）



写真35 D28号土坑（東より）

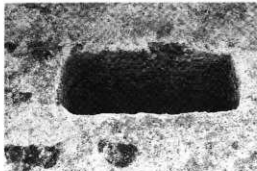


写真36 D30号土坑（北より）

第3節 溝状遺構（第17図、写真37・38）

調査区の北側の低いところにM3・M4号溝状遺構がある。

M3号溝状遺構は北東から南西に向かうもので、東の曾根新城遺跡Ⅲ地区から続くものである。幅2.5～3m深さ70cm前後を測る。断面形は低くなる北西ではU字形になるが大半は緩くきて下部が垂直に近く落ちている。覆土は砂質の黒褐色土である。遺物は弥生時代の甕破片3片がある。

M4号溝状遺構はM1より少し南の高いところをM1と同方向に流れる細く浅い溝である。幅80cm前後深さ12～24cmを測る。覆土は砂質の黒褐色土と底面近くに砂層があった。遺物は内外面ロクロ横ナデの杯片2と須恵器の甕片1が出土している。

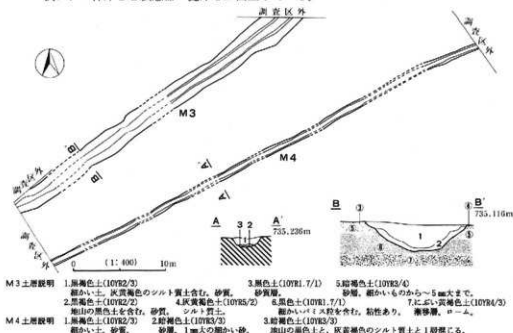


写真37 M3号溝状遺構（西より）



写真38 M4号溝状遺構（西より）

第V章 調査のまとめ

縄文時代

縄文時代前期とされている落とし穴が4基検出された。槽円形を呈し、底面に枕状の木を埋めたピットを残すものであるが、2基に良好例がみられた。ピットを掘って枕状の木を埋めた様子がピットを断ち割ることで明確に看取できた(D19・D22)。D22から黒曜石製の石鎌が出土し、遺構から伴出したことは遺物の少ない落とし穴としては貴重である。縄文の集落のない曾根新城遺跡や上久保田向遺跡から前期の土器が拾えることに関連しているものと思われる。

平安時代

竪穴住居址

3300㎡の中に2棟という散村を思わせる分布である。土器などより11世紀末から12世紀にかけての住居址であろうと設定してみた。南東隅カマド、長方形化した住居址形などは曾根新城遺跡では中心となっている(詳細は区画整理事業の報告まで待ちたい)。近隣では上久保田向遺跡Ⅳ地区H14・16号住居址、上聖端遺跡H46号住居址、南上中原・南下中原遺跡H4・H5・H11号住居址、T a 1・2 竪穴状遺構が報告されている。未報告の遺跡でも聖原遺跡・高山遺跡などにある。(三石宗一氏による。)

類例が他の時期に比べて少ないが、竪穴住居址の平安時代末から中世にかけて資料が集積されてきたことは今後に期待できる。

遺物

ここでは今後の資料として器種構成と土器の数値を示し、簡略なまとめをしておきたい。

H19 甕・羽釜・杯・小皿・碗破片・皿ナシ・須恵器大甕片・灰釉陶器壺片

H20 甕ナシ・羽釜・杯・小皿・碗・皿(コウダイツキ)・須恵器甕片・灰釉陶器ナシ

H20の小皿は器高が低く口径が大きい。皿器形がない。

H19		H20	
杯	小皿	杯	小皿
口径14.0~14.2cm	口径8.6~9.5cm	口径15.0~15.4cm	口径9.0~9.4cm
器高4.6~5.1cm	器高2.1~2.6cm	器高4.1~4.6cm	器高2.1~2.3cm
底径6.1~7.0cm	底径4.2~5.2cm	底径7.0~7.4cm	底径4.8~5.4cm

小皿の数値は南上中原・南下中原遺跡のH11の数値の範囲内に入る。

H19号住居址 甕が多い。

杯に5のように小さい底部から直線的に開くものと、6のように内湾気味に開くものとある。

小皿は2種あり、細身のものと肥厚したものがある。

H20号住居址 杯類が多い。杯は底径7.0cmに数値が集まり、一定している。直線的に外傾する。

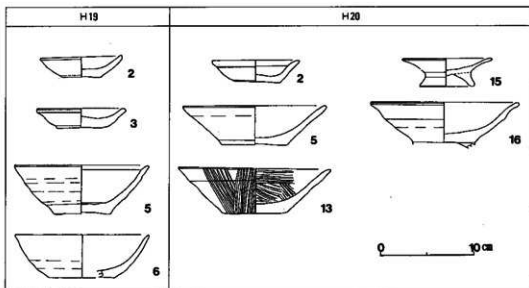
小皿は内縁を持って外傾する。高台の付く杯の皿は小型で口縁部は外反気味である。

杯・小皿・碗の胎土は粉末質の細かいものである。

これらより2棟は同時期ではあるがH20号住居址がやや新しい様相を持っていると思われる。しかし、決定的要素はない。H19の小皿は南上中原・南下中原遺跡のH11（白磁碗などから12世紀前半に比定している）の小皿と同じものがある。柱状高台はみられない。底部径が一定化していることから「底部柱状作り」の製作技法が推測される。

土坑群

北西にあるD23～D27・D29・甕土範圍は遺物の伴うものから判断すると平安時代末のものである。住居址が削平されて下の土坑が残ったのかはわからないが、一群をなしている。



第18図 曾根新城遺跡V地区の杯類

引用参考文献

- 1 白倉盛男1990『聖原遺跡Ⅰ』第2章遺跡の立地と環境
- 2 小平和夫1990『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書—松本市内その1—総論編』第3章第5節古代の土器
- 3 望月 映1990『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書—松本市内その1—総論編』第3章第1節古代の竪穴
- 4 寺島俊郎1991『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書2—佐久市内その2—』第18節1～3
- 5 原 明芳1989『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書3—塩尻市内その2 吉田川西遺跡』第7章第2節「吉田川西遺跡における食器の変容」
- 6 堤 陸1985『聖原Ⅱ遺跡』第Ⅱ章聖原Ⅱ遺跡の環境
- 7 佐久市教育委員会1993『南上中原・南下中原遺跡』
- 8 佐久市教育委員会1993『上聖端遺跡』

堅穴住居址一覧表

番号	規模	主軸方位	カマド	形 態	柱 穴	床の 状 態	覆 土 他	位 置
E19	5.1×4.2×0.2m	N-18°-W	南東	隅 丸 長方形	3	堅い貼り床	土坑2 黒色土。下に旧住居あり。	P き-7
E20	5.0×4.5×0.2m	N-30°-W	南東	隅 丸 長方形	4	堅い貼り床	土坑1。床下土坑1。 黒色土。下に旧住居あり。	P う-1

土坑一覧表

番号	規模	形 態	覆 土	そ の 他	位 置
D19	3.0×1.4×0.46m	楕円形	黒色土・褐色土・にぶい 黄褐色ローム	底面に杭痕3ヶあり。一辺8mm大。 ビット径15~22cm深さ48cm。	Pあ-10
D20	(2.5)×1.4×0.4m	"	"	底面にビットなし。	Oけ-8
D21	3.0×(1.3)×0.56m	"	"	浅いビット3ヶあり。	Pこ-7
D22	3.1×1.7×0.7m	"	"	杭痕2ヶあり。ビット径16-20cm深さ 50cm。	Pえ-4
D23	1.5×1.0×0.3m	"	黒褐色土。下層に炭化物・ 焼土・灰含む。		Qあ-8
D24	2.1×1.2×0.3m	"	黒褐色土		"
D25	0.7×-×0.16m	不整形	黒褐色土。焼土粒子多く 含む。		Pこ-4
D26	0.5×-×0.19m	円形	黒褐色土・黒色土		"
D27	0.7×-×0.16m	"	"		Pこ-3
D28	1.4×0.8×0.16m	隅丸長方形	黒褐色土・焼土粒子含 む。		Iい-8
D29	0.7×-×0.25m	円形	黒褐色土・下層に灰を含 む。		Qい-4
D30	1.4×0.6×0.84m	隅丸長方形	黒褐色土・褐色土しま状 に堆積		Tか-2
D31	1.4×0.6×0.52m	"	"		"

曾根新城遺跡V地区土器一覧表

H19号住居址

番号	器種	法量			器形の特徴	調整	備考
		口径	高さ	底径			
1	ヘビ 小皿	9.5	2.8	4.4	縦線的に開き、両唇ナデ取 かする。	内・外面ロクロコナデ。 底唇凹転水切り。	ほぼ球形。色調2.SY85/4Cに ぶい赤褐色。胎土粉 末質の細かいもの。
2	ヘビ 小皿	8.6	2.3	4.2	※	ロクロコナデ。 底唇凹転水切り。	十流。色調2.SY85/4Cに ぶい赤褐色。胎土 粉末質の細かいもの。
3	ヘビ 小皿	9.3	2.1	5.2	分厚い。口縁部外反気味。端 部のみあり。	ロクロコナデ。 底唇凹転水切り。	十流。色調SY85/6褐色。胎土 粗粒。1~5mmの 砂を含む。
4	ヘビ 小皿	9.0	2.1	4.7	分厚い。口縁部外反気味。 胎土のみが着しい。	ロクロコナデ。内面に比線有 り。底部凹転水切り。	十流。色調10YR5/3Cにぶい 黄褐色。胎土粉 末質の細かいもの。
5	ヘビ 杯	14	5.1	6.1	口縁部直線的に外傾。端部は 外反気味。底部小さい。	ロクロコナデ。底唇凹転水切 り。ロクロコナデ。色調内 面SY82/1黒褐色土。	十流。色調2.SY84/6赤褐色。胎 土粗粒。
6	ヘビ 杯	14.2	4.6	7.0	口縁部内湾気味にたもあがり 端部は外反気味。	ロクロコナデ。 底唇凹転水切り。	十流。色調SY85/6B赤褐色。胎 土粗い砂を含む。
7	ヘビ 罎	11	10.8	-		内面コナデ。外面ヘラケズリ、 イガキ(胴上部)	近球形。色調SY84/4Cにぶい 赤褐色胎土1mm程の石 灰粒まじりに3~5mm粗い砂 粒

H20号住居址

番号	器種	法量			器形の特徴	調整	備考
		口径	高さ	底径			
1	ヘビ 小皿	9.4	2.1	5.4		ロクロコナデ。 底唇凹転水切り。	十流。色調7.SY88/4Cにぶい 褐色。胎土粉 末質の細かいもの。
2	ヘビ 小皿	9.3	2.4	5.0	内湾有り。	ロクロコナデ。 底唇凹転水切り。	十流。色調10YR5/4Cにぶい 黄褐色。胎土粉末 質の細かいもの。
3	ヘビ 小皿	9.0	2.3	4.8	内湾有り。	ロクロコナデ。 底唇凹転水切り。	十流。色調SY85/6褐色。胎土 粉末質の細かいもの。
4	ヘビ 小皿	9.2	2.3	4.5		ロクロコナデ。 底唇凹転水切り。	十流。色調7.SY88/6褐色。胎土 粗粒。
5	ヘビ 杯	15.2	4.1	7.0	口縁部直線的に外傾。	ロクロコナデ。 底唇凹転水切り。	十流。色調7.SY87/4Cにぶい 褐色。胎土粉末 質の細かいもの。
6	ヘビ 杯	15.2	4.6	7.0	口縁部やや内湾気味に外傾。	ロクロコナデ。 底唇凹転水切り。	十流。色調7.SY87/4Cにぶい 褐色。胎土粉末 質の細かいもの。
7	ヘビ 杯	15.0	4.6	7.0	口縁部内湾気味に外傾し、上 部で外反気味になる。	ロクロコナデ。 底唇凹転水切り。	十流。色調SY87/4Cにぶい 褐色。胎土粉末 質の細かいもの。
8	ヘビ 杯	15.4	4.3	7.0	口縁部内湾気味に外傾。	ロクロコナデ。 底唇凹転水切り。	十流。色調7.SY84/2K褐色。胎 土粉末質の細かいもの。
9	ヘビ 杯	-	4.3	7.2		ロクロコナデ。内面ロクロ 換麻漉。	底唇十流。色調SY87/4Cに ぶい褐色。胎土粉末 質の細かいもの。
10	ヘビ 杯	-	4.0	7.4		ロクロコナデ。 底唇凹転水切り。	底唇定。色調7.SY87/4Cにぶ い褐色。胎土粉末質の 細かいもの。
11	ヘビ 杯	-	2.1	7.0		ロクロコナデ。 底唇凹転水切り。	底唇定。色調7.SY86/6褐色。胎 土粉末質の細かいもの。
12	ヘビ 杯	-	2.7	7.0		ロクロコナデ。 底唇凹転水切り。	底唇定。色調7.SY87/4Cにぶ い褐色。胎土粉末質の 細かいもの。
13	ヘビ 罎	16.4	4.9	7.0	口縁部直線的に外傾。	内外面イガキ。 底唇凹転水切り→イガキ。 ロクロコナデ。	光沢。色調2.SY88/6褐色。胎 土粉末質の細かいもの。
14	ヘビ 罎	-	2.0	6.0	高台付足。 小皿型。		底部十流。色調SY86/6褐色。胎 土粉末質の細かいもの。
15	ヘビ 罎	9.4	3.2	5.8	高台付足。小皿型。口縁部 外反気味に開き、平になる。	ロクロコナデ。 底唇胎り付け高台。	十流。色調SY85/6褐色。胎土 石灰粒を含む。
16	ヘビ 罎	15.6	4.8	-	高台付。	ロクロコナデ。 底唇凹転水切り一胎り付け高 台	十流。色調7.SY87/6褐色。胎 土粉末質の細かいもの。
17	スエ 罎	-	-	-	口縁部のみ。	外反唇文(4本)。 内面ナデ。	口縁部片。色調2.SY87/2C黄 褐色。胎土粗粒。

土坑

番号	器種	法量			器形の特徴	調整	備考
		口径	高さ	底径			
1	ヘビ 罎	-	2.1	6.0	D25・28 高台付	内面イガキ黒色底。外周ロ クロコナデ。底胎り付け高台。 色調内面10YR1.7/1黒色土。	底唇定。高台部十流。色調 10YR5/4Cにぶい黄褐色。胎 土粗粒。
2	ヘビ 杯	-	3.0	6.0	D29	ロクロコナデ。 底唇凹転水切り。	底部十流。色調SY87/6褐色。胎 土1mm大の粗い砂を含む。



曾根新城遺跡航空写真（○印が曾根新城V地区）左手の調査中の所は上久保田向Ⅲ・Ⅳ地区である。（朝日航洋社撮影）（東より）



曾根新城付近航空写真（○印が曾根新城V地区）（朝日航洋社撮影）（西より）



小皿 H19, 7-1



小皿 H19, 7-2



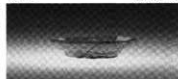
小皿 H19, 7-3



小皿 H19, 7-4



杯 H19, 7-5



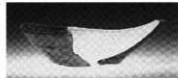
小皿 H20, 10-1



小皿 H20, 10-2



小皿 H20, 10-3



杯 H20, 10-5



杯 H20, 10-8



杯 H20, 10-10



杯 H20, 10-13



皿 H20, 10-15



碗 H20, 10-16



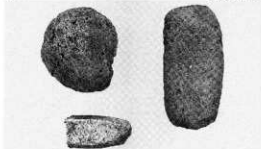
碗 D25-26, 16-1



杯 D29, 16-2



燹 H19, 7-7



H20 凹みを持つ軽石、H19 スリ面のある安山岩（カマド）、H20 砥石（凝灰岩）



M 2 黒曜石剝片、D22黒曜石石鎌

佐久市埋蔵文化財調査報告書	第1集	『金井城跡』
佐久市埋蔵文化財調査報告書	第2集	『市内遺跡発掘調査報告書1990』
佐久市埋蔵文化財調査報告書	第3集	『石附築地石Ⅱ』
佐久市埋蔵文化財調査報告書	第4集	『大ふけ遺跡Ⅱ』
佐久市埋蔵文化財調査報告書	第5集	『立科下遺跡』
佐久市埋蔵文化財調査報告書	第6集	『上曾根遺跡』
佐久市埋蔵文化財調査報告書	第7集	『三貫畑遺跡』
佐久市埋蔵文化財調査報告書	第8集	『藪の下遺跡』
佐久市埋蔵文化財調査報告書	第9集	『国道141号線開供遺跡』
佐久市埋蔵文化財調査報告書	第10集	『壱原遺跡Ⅱ』
佐久市埋蔵文化財調査報告書	第11集	『赤塚垣外遺跡』
佐久市埋蔵文化財調査報告書	第12集	『若宮遺跡Ⅱ』
佐久市埋蔵文化財調査報告書	第13集	『上高山遺跡』
佐久市埋蔵文化財調査報告書	第14集	『栗毛坂遺跡』
佐久市埋蔵文化財調査報告書	第15集	『野馬久保遺跡』
佐久市埋蔵文化財調査報告書	第16集	『石並遺跡』
佐久市埋蔵文化財調査報告書	第17集	『市内遺跡発掘調査報告書1991』(1月~3月)
佐久市埋蔵文化財調査報告書	第18集	『西曾根遺跡』
佐久市埋蔵文化財調査報告書	第19集	『上芝宮遺跡』
佐久市埋蔵文化財調査報告書	第20集	『下瀬端Ⅱ』
佐久市埋蔵文化財調査報告書	第21集	『金井城跡Ⅱ』
佐久市埋蔵文化財調査報告書	第22集	『市内遺跡発掘調査報告書1991』
佐久市埋蔵文化財調査報告書	第23集	『南上中原・南下中原遺跡』
佐久市埋蔵文化財調査報告書	第24集	『上瀬端遺跡』
佐久市埋蔵文化財調査報告書	第25集	『上久保田Ⅱ』
佐久市埋蔵文化財調査報告書	第26集	『藤塚古墳群・藤塚Ⅱ』
佐久市埋蔵文化財調査報告書	第27集	『上久保田Ⅲ』

佐久市埋蔵文化財調査報告書 第28集

曾根新城遺跡Ⅴ

長野県佐久市長土呂

曾根新城遺跡Ⅴ地区発掘調査報告書

1994年3月31日

編集・発行 佐久市教育委員会

〒385 長野県佐久市大字志賀5963

電話(0267)68-7321

印刷 株式会社 樺くいちい